

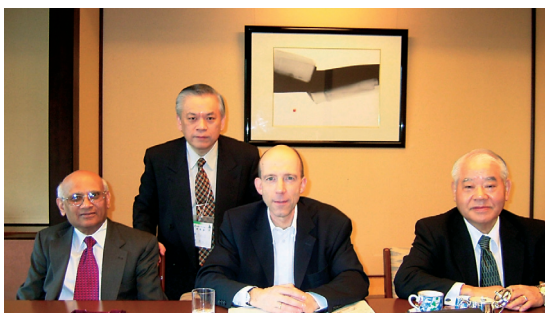
日本薬剤学会 (APSTJ) ニュース

4

国際薬学連合との連携 Alliance between APSTJ and FIP

日本薬学会第127年会が3月28～30日に富山で開催されるに合わせて、国際薬学連合(FIP)の学術部門(BPS: Board of Pharmaceutical Science)の議長であるDaan J.A.Crommelin氏が来日し、同年会で特別講演を行った。

日本薬剤学会はFIPのBPSの主要メンバーの1つで、FIPの中で重要な地位を占めている。Crommelin氏に日本薬剤学会に対する期待、FIPの今後の活動、さらにCrommelin氏自身の薬学への取り組みなどについて話を聞いた。



左前からFIP・BPSの学術総務担当のVinod Shah氏、Crommelin氏、永井恒司氏、後はFIP副会長および日本薬剤学会会長の橋田充氏。富山全日空ホテルにて。

FIPにおける日本薬剤学会の位置づけ

日本薬剤学会は1985年の設立後間もない1988年に正会員としてFIPに加盟。2000年4月にサンフランシスコで開催されたFIP2000年世界薬科学会議(PSWC)では、日本薬学会と日本薬剤学会の合同で国内準備委員会を組織して運営に協力、さらに永井記念薬学国際交流財団理事長の永井恒司氏がFIP本部の副会長を2期、東京大学薬学部の杉山雄一氏がBPSの議長を務めるほか、数多くの日本の薬学研究者がその運営に携わり、日本の貢献は高く評価されている。

「FIPは世界各国の薬学関連の団体が集まる国際的な組織で、大きく2つの部門から構成されており、1つは薬剤師の職能に関する部門(BPP: Board of Pharmaceutical

Practice)でもう1つがBPSである。画期的な医薬品の開発と適正使用の実現を可能とする薬学の科学・技術の重要性が強く意識されるようになったことからFIPは職能と学術の2本柱で活動しており、BPSではタンパク医薬、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、遺伝子デリバリーなどにも積極的に取り組んでいる。日本には、永井先生をはじめ、橋田充先生、杉山雄一先生など『メジャープレイヤー』の先生方がFIPやBPSのボードメンバーとして参加されており、その先生方が中心となって活動されている日本薬剤学会はBPSにとって非常に大きなポジションを占めている。さらにBPSの分科会的位置づけであるSIG (Special Interest Group)では、個別化医療や遺伝子治療に関して長崎大学の佐々木均先生が、バイオテクノロジーに関して北海道大学の原島秀吉先生が中心となって活発に活動をしていただいている」。

レギュラトリーサイエンスにも注力

先端科学技術の分野に積極的に取り組んでいるBPSであるが、「最新のテクノロジーだけでなく、品質システム、レギュラトリーサイエンス、偽薬、情報テクノロジー、さらに教育などについても注力している」とCrommelin氏は語る。

「BPSは、疾病治療に向けた適切な科学や技術をいかに開発するか、その際に何が倫理的な問題かなどについてディスカッションする中立な『プラットフォーム』を提供しているだけでなく、発展途上国の医薬品の品質システムの確立をサポートするトレーニングプログラムも提供するなどその活動の幅は拡大している」。

その世界の薬学のサイエンスの「プラットフォーム」の1つとなる場がBPSが主催するPSWCである。サンフランシスコでの開催に次いで、第2回目が2004年に京都で世界60カ国から二千数百人の研究者を集め開催された。

「第3回目は4月22～25日までオランダ・アムステル

国際薬学連合との連携

ダムで開催されるPSWC2007で、ヨーロッパでのPSWC開催は今回が初めて。今回のテーマである、『薬物治療の最適化：全人類の健康に向けて』のもと、活発なディスカッションが期待される。FIPの活動は基本的にボランティアで行われており、PSWCの開催においても日本薬学会の貢献は非常に大きい。今後とも協力体制のもと薬学の発展に寄与していきたい。

オランダの製薬関連コンソーシアム 「TI Pharma」

BPS議長を務めるCrommelin氏は、ユトレヒト大学薬学部とユタ大学薬学部教授を兼任する一方、リボソーム技術やナノテクノロジー、バイオテクノロジー技術を駆使したドラッグデリバリーなどの開発を手がけるOctoPlus社の創設者の1人。また、PSWC2007の組織委員長を務めるほか、ヨーロッパ薬学連合(EUFEPS)の次期会長にも選任されているなど、ヨーロッパの薬学界のリーダーと言っても過言ではない。そのCrommelin氏が現在、新たな取り組みを始めている。

「オランダの大学、企業、政府が協同でオランダの創薬を支援するというコンソーシアム『TI Pharma』が

設立され、私はそのサイエンスディレクターを務めている。大学、企業、政府がそれぞれ1：1：2の割合で出資して60ミリオンユーロ(約90億円)で仮想企業を設立し、200人のPh.D.と150名のポストクの研究活動の支援を行っている。現在、企業からはグローバル製薬企業15社、中小規模の製薬企業15社がこのユニークな取り組みに参加するなど国家的なプロジェクトとなっている。この活動はオランダの薬科学が発展する大きなきっかけになると確信している」。

さらなる連携に向けて

今回の日本薬学会第127年会でのCrommelin氏の特別講演は急遽開催が決定されたため、講演要旨集にプログラムが掲載されなかったにも関わらず、同氏の「バイオテクノロジー製品に対するナノテクノロジーを活用したドラッグデリバリー技術」および「EUFEPS, TI PharmaおよびFIPの活動」の2講演は数多くの聴衆者を集めて開催された。

日本薬学会会長の橋田氏は「FIPを場とした国際貢献は、日本薬学会にとっても非常に重要な活動である。今後は、若い世代の先生に世界でさらに活躍していただけるよう学会として応援したい」と述べ、FIPと協調した学会の国際化への意気込みを示している。